

イエスの昇天物語は他の福音書には記されていません。50～53 節は、同じ著者による使徒言行録 1 章と呼応して、それらを結びつける働きをしています。復活させられたイエスはオリーブ山から昇天されたと広く理解されていますが、ルカの著作にも、新約聖書のどの文書にも、復活させられたイエスがオリーブ山から昇天されたという記事は記されていません。復活させられたイエスは弟子たちから離れるとき、「手を上げて祝福された」と記されています。手は複数形ですから、イエスは両手を上げて弟子たちを祝福しながら天に上げられた、と記すのです。このことは、イエスは私たちに祝福を与える方であり、その祝福はいつまでも私たちの上に注がれていることを示しています。祝福こそ、私たちがイエスを信頼し、イエスと共に生き始めた時、私たちの全ての歩みを根本から支える力なのです。天に上げられるということは、弟子たちから離れることであり、彼らにとって本来悲しい出来事ではないでしょうか。しかし、弟子たちは十字架の死によりイエスを失った時のように、悲しみにくれるようなことはありませんでした。それは、弟子たちにとって、この出来事が、イエスが遠くへ行ってしまうということではなく、むしろ逆に、天、神さまが近くなり、救いの世界が近くなるので、喜ばずにはいられなかった、と記すのです。天に上げられるイエスを見て、弟子たちはイエスを伏し拝みます。この「伏し拝む」は「礼拝する」ことを表す言葉で、この福音書の中で弟子たちがイエスを礼拝したと言われているのはここだけです。つまり、ここで初めて弟子たちはイエスとはどういう方であるかを本当に理解することになった、と記すのです。

こうして、イエスが弟子たちに特別な形で姿を現す期間は終わり、目に見えない形で彼らとともに歩み続ける時代が始まるのです。この福音書は、「復活→昇天→聖霊降臨」を時間的な流れの中で起きた出来事として記していますが、他の福音書はそうではありません。復活、昇天、聖霊降臨という 3 つの出来事は別々の出来事というよりも、イエスの死の後に実現したこと全体のいろいろな側面を表しているとも言えるのです。「復活」は、イエスが今も生きて、私たちと共にいる、ということを表します。「昇天」は、イエスが単に地上の生に舞い戻ってきたのではなく、神さまのもとに行き、そこで神さまとともに永遠のいのちを生きる方となったということを表します。そして、「聖霊降臨」はイエスが目に見えないけれども私たちのうちに今も働いていることを表します。

私たちの歩みは肉体の死で終わる歩みではなく、死を通して最終的に神さまのもとに、天に至る歩みなのです。